

学校教育課たより

伊達市教育委員会教育部学校教育課
平成26年3月13日発行
発行責任者：学校教育課長
西牧 伸弘

巻頭言

「逆境をプラスのエネルギーに」

伊達市教育委員会教育部
学校教育課長 西牧伸弘



今冬にソチオリンピックが開催され、様々な選手が栄光をめざして競い合い、私たちに多くの感動を与えてくれました。

四年に一度という大会であるが故に、他の大会にはない特別な雰囲気があり、様々なドラマが生まれたことは記憶に新しいところです。

とりわけ、スキージャンプ競技で、41歳という年齢で見事“銀メダル”を獲得した葛西紀明選手については、誰もが彼の偉業を讃えています。これまでに7回のオリンピックに出場し、ずっと世界のトップアスリートの一人として居続けるということは、「本当にすばらしい！」の一言です。

7回のオリンピックを経験するには、実に、20数年の長い期間があったわけですが、この間、年齢による体力の衰えや怪我やアクシデントはもちろんのこと、ジャンプスタイルがV字に変わったり、板の長さやスーツの規定が変わったりと、多くの試練ともいえる変化があり、それに対応するのにも大変な努力が必要だったとのことでした。

実際に、彼のこれまでの成績を振り返ると、記録が低迷した時期もありました。さらに、不景気による影響で、競技を続けるために会社を転々としなければならなかったということもあったと聞きます。そういった様々な苦勞を乗り越え、今大会で個人メダルを獲得できたことは、これまでのトレーニングを怠らず、練習や試合に飽くことなく取り組んできた葛西選手自身の並大抵ではない努力が核にあるのは間違いありません。そして、その努力を支えた彼の精神力の強さも忘れるわけにはいきません。

その精神力の強さの根底にあり、彼をソチオリンピック出場に駆り立てたのは、あと一歩というところで団体金メダルを逃したりレハンメルオリンピック、直前の怪我で団体戦のメンバーから外されて悔しい思いをした長

野オリンピックのことがあったからと言われている。このような彼自身が味わった挫折ともいえる経験が強いプラスのエネルギーとなったと言えます。ともするとこのような負の体験に対し、人は他にその責任や理由を求めてしまいがちですが、彼は、それを「何としても自分の力で金メダルを取りたい。」と自分の夢を高く掲げて努力を継続する糧にしたのです。

このことを本市の教育現場に置き換えてみますと、多くの学校で、この葛西選手のように、今置かれている逆境をプラスのエネルギーに変えて、「本来こうありたいと思う教育」を展開しようと努力している学校が数多くあり、ありがたく思っております。例えば、学校の除染を地域や保護者の方々で行うことにより地域の教育力を学校に呼び戻したり、あんぼ柿の復活を地域の方々とともに宣伝したりと、それぞれの学校が置かれた状況に応じて特色ある教育を展開していただきました。

市教委でも、『吹奏楽きらめき事業』を推進し、市内全中学校の参加により、吹奏楽を中心とした音楽による本市の教育活動の活性化を図るべく活動を続け、その成果と新たな広がりを実感しているところです。

学力向上や体力向上など様々な課題はありますが、その課題を乗り越えるため、葛西選手のように理想を高く掲げて挑戦していかなくてはと決意を新たにした次第です。



「ひょうたんひな人形」

(自分で育てたひょうたんで製作)

伏黒幼稚園 大波 星麗音(せれね)



学校訪問を振り返って

～知識基盤社会をたくましく生き抜く伊達の子どもをめざして～



今年度の学校訪問は、小学校14校、中学校3校、幼稚園6園、計23の学校、園で実施してまいりました。各学校・各幼稚園におかれましては、校長先生、園長先生のリーダーシップの下、学校訪問をそれぞれの課題解決のためのよい研修の機会と捉えて取り組んでいただきました。学校経営にあたっては、多くの学校で保護者、地域との信頼関係を構築し、協力体制のもとに開かれた学校・特色ある学校を目指して取り組んでいました。

小規模校であれ、大規模校であれ、全教職員が、目指す園児・児童生徒像に向かって一丸となって取り組むことで大きな成果に繋がっていることを子どもの学ぶ姿で伺うことができました。授業では、自分の考えをしっかりと持たせ「言葉で・言葉に表す」活動を重視し、学んだことを表現する「言語活動の充実」を意識した授業も多く実践されていました。

また、個の考えを小グループや全体で交流したり、話し合ったりすることで共同的な学び合いとなり、学びの定着につながった質の高い授業も見られました。

また、一人一人を大切にしたいきめ細かな指導、園児・児童生徒の実態に応じた活動の場

の設定の工夫、机間巡視による個別指導、学習の定着を図る場での習熟度別問題の活用等、個に応じた適切な指導によりねらいの達成につながる実践が数多く見られました。

学校訪問では、今までの授業を振り返り、その後の日々の授業実践に役立てていただくことを第一義と考え、授業分科会を重視してまいりました。その分科会では、「子どもたちにもっと力を付けさせたい。」「さらに授業を改善し授業力を向上させたい。」という思いから、どの学校訪問でも時間を忘れるほどの白熱した協議がなされました。その姿こそが、子どもたち一人一人の心を揺り動かし、学習意欲や学習の楽しさを味わわせることにつながり、最終的には、園児・児童生徒一人一人の「力」に結びつくものと考えます。

学校訪問には、伊達地区学校教育研究員も参加させていただき、素晴らしい研修の機会となっておりますことに、この場をお借りして心より感謝申し上げます。次年度も目を輝かせて生き生きと意欲的に活動、学習に取り組む園児、児童生徒の育成に役立つ学校訪問を実施していく予定です。ご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。



授業の質を高め、子どもたちに確かな学力の向上を！



伊達市では東日本大震災以前の学力の状態に戻すことを目標に、中学校区に学力向上推進委員会を組織し、地区の児童生徒の実態に応じた計画を立て、各校で実践的に取り組んできました。成果は道半ばというところですが、学力向上に特効薬はなく、一時間一時間の授業の積み上げにより、徐々に確かな学力が身に付いて行くと考えています。そのためにも毎日の授業の質の高さが要求されます。

・・・授業は時刻どおりに始まり、時間内にねらいを達成して終了する。黒板には『めあて』も『まとめ』もきちんと書かれ、学習の流れや内容も明確である。教師の説明よりも、子どもの主体的な活動や話し合いが十分に展開される。一人一人の学習を見取り、状況に応じて適切に指導する。子どもを待たせることなく、授業がテンポよく進行する。わかったこと、できたことを子どもと教師で共有している・・・。

そのような授業をたくさん拝見しましたが、授業の質を高めるためにも、我々は日々研鑽に努め、授業力を高めなければと身が引き締まります。今年度も各中学校区で授業改善に向けての授業研究会が充実しました。

言語活動の取入れ方、思考の吟味と共有を伴う学び合いの仕方、定着確認シート等の活用等々、教員同士の学び合いの機会になりました。また、核となる研究会として、10月には伊達小学校で全国国語教育研究大会が、11月には梁川小学校で伊達市学力向上授業研究会が開催され、貴重な研究の一端を拝見することができ、よい研修となりました。次年度も、一人一授業以上を目標に、授業研究会を充実し、授業力を磨き合いたいものです。

さらに、学習内容の確実な定着を図るために適用問題の取入れが重要となります。各学級では、教科書やドリル等を工夫されているところと思いますが、県教委からは定着確認シートやフォローアップシート等が示されていますので効果的に活用したいところです。

また、市教委では、小学5年生と中学2年生を対象に、『全国学力・学習状況調査の過去問題集』を作成しました。更なる伸びが期待される子どもたちです。授業での取組に加えて、問題や調査方法に慣れることも必要です。是非、繰り返して納得するまで取り組み、成果の上がることを期待しております。

「学び続ける教師をめざして」

＜本年度の研修講座を振り返り、次年度の充実にに向けて＞

昨年度から開講した「伊達市教職員研修講座」は、2年目を迎え教育課題や研修のニーズ等を踏まえ改善充実に図って参りましたが、各学校、教職員の皆様のご理解と積極的な参加により延べ人数で昨年を上回り、充実した研修講座となりました。そこで、この2年を振り返り、「研修講座の意義」を再度考えるとともに、次年度の改善充実の方向性についてお知らせいたします。

伊達市教育委員会の「教職員研修事業」のねらいに、「21世紀にふさわしい『学び』の姿を実現するために、教職員をはじめとしたスクールスタッフの専門性向上を目指した研修事業を推進する。」とあります。このねらいのキーワードは「21世紀にふさわしい学びの姿」ではないでしょうか。つまり、21世紀を生き抜かなければならない子どもたちにとって今までの学びで大丈夫かということです。

翻って、現在の学びの状況を顧みると「教師が教える比重が多い授業」「答えを求めるだけの授業」等がまだ見受けられます。つまり、知識技能の伝達型の授業です。

「児童生徒の主体的な学び」「テキストを読み解き、自分の考えを持ち、コミュニケーション力を身につけ『協働』『協調』と言われる課題解決法を身に付ける」ことが求められていることは分かっているが改善の努力が見られるものの発想や指導法の思い切った転換ができずにいるのではないのでしょうか。

伊達市の学力の現状からも、日常の授業の改善が求められるところですが、教職員研修講座での研修が、少しでも役に立てばと思います。次年度は「授業づくり」の再確認、「新しい学び」についての理解、「学級づくり」の視点での特別活動、スクールコーチングなどを計画しております。いわゆる中央からの講師も招聘し、時代に合った研修を進める予定です。伊達の子どものために「学び続ける教師」をめざして多くの皆様の受講を期待しております。



平成25年度 伊達市教職員研究論文・研究物展

今年度の伊達市教職員研究論文・研究物展には、昨年度より一作品多い34点(共同研究28点、個人研究6点)の応募がありました。

2月3日に行われました審査会において、最優秀賞2点、優秀賞9点、特別賞4点、奨励賞2点、優良賞17点が選ばれました。

最優秀賞受賞校・受賞者

- 伊達市立掛田小学校〔共同研究〕
- 嶋原 啓美 教諭(掛田小学校)〔個人研究〕

詳細については伊達市教育委員会ホームページに掲載されていますのでご覧ください。



最優秀賞・特別賞・奨励賞を受賞した皆様

講評 審査委員長 家久来 三典(月館中校長)

今年度の研究物展は、県の秀作論文の特別賞を受賞された研究をはじめ、優れた共同研究や個人研究が多く出品されました。

研究物を拝読しての感想を三点にまとめると、一つ目は、研究主題やテーマが自校の子どもの実態を的確に捉えたものになっていました。

二つ目は、授業を中心として実践・検証され、子どもたちのまとめや感想、アンケート調査から成果や課題が客観的に分析され、累積化されていました。

三つ目は、学習の主体者である子どもたちを常に実践の中核に据え、「学び合い」をキーワードに取り組まれていました。

今後も研究物展が、学校の枠を超えた「学び合いの場」であることを願っています。



ぜひ、先生方の日々の実践を形にして、次年度の研究論文・研究物展に応募していただけることを心よりお待ちしております。

平成25年度 優秀教職員表彰

先生方が子どもたちへの思いを持って、熱心に指導されている様子を、学校訪問をはじめ各校の学校便りや学級通信、ホームページ等から拝見することができました。今年度も本市の教育の充実と進展のため、ご尽力いただきましたことに心より感謝申し上げます。

今年度の伊達市教職員表彰式が、3月10日に梁川分庁舎で行われ、本市の学校教育の進展に、特に貢献のあった5名の教職員へ、高野保夫教育委員長から賞状と記念品が授与されました。受賞者は以下の通りです。

<受賞者>

○ 武澤	ひろみ	教諭 (伊達小学校)
○ 岡崎	圭子	教諭 (堰本小学校)
○ 金成	豊	教諭 (大田小学校)
○ 内藤	雄一	教諭 (月舘小学校)
○ 遠藤	範子	教諭 (桃陵中学校)

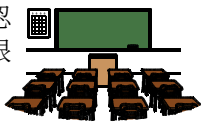
今回受賞された皆様には、今後、学級経営や学習指導等の優れた手法を各学校に広めていただき、本市の学校教育をリードする存在としてご活躍くださることを期待しております。



新年度に向けて・・・

3月24日から4月4日まで10日間、短期間ではありますが、ぜひ次のことを進めておきましょう。

- ① 理科薬品の残量の照合
- ② のこぎり、包丁等の刃物類の一目して不足が判る工夫
- ③ 不要な物の適切な処分
- ④ 机、椅子等の整備。(特に新入生のもの)
- ⑤ 適切な教材選定
- ⑥ 通学路の安全確認
- ⑦ 年度末年度始に発生した場合の学校事故等の対応の確認
- ⑧ 運転免許証等の有効期限確認のための現物提示



いくつかは、学校訪問において改善を指示した内容です。万が一の事態に対応できるように、「整理から管理へ」に重点をおき、進めてください。

また、新たな気持ちで4月7日の始業式、入学式を迎える児童生徒の気持ちに応える校舎、教室環境の整備を望みます。

最後に、教職員の皆さんの、新年度に向けての体調のリフレッシュをお願いします。

子どもの幸せを願って

現在の「スクールソーシャルワーカー(以下SSW)活用事業」は、大震災発生後「SSW緊急派遣事業」の形で24年度から継続実施されている。私は25年度に伊達市に配置されたSSWであり、精神保健福祉士である。前年度は震災2年目でもあり特定の学校を中心とした配置だったが、市内全ての小・中学校が活用できるように市教委配置となった。

今、振り返って言えるのは、原発事故を含む被災関連要因のほか、実際に表面化している問題は、「家庭(社会)環境の課題」「子どもの発達課題」「身近な大人の関わり方の課題」という震災以前からもあった3つの大きな課題が背景要因として様々な現象を顕在化させているということである。つまり、「見えるもの」と「見えないもの」を的確に冷静に理解しながら、「問題をなくす」ための実践を重視するのではなく、「どうすることが子どもたちにとって最善の利益になるか」を身近な大人たちがひとつのテーブルで「子どもを真ん中」にして話し合い、手を取り合って実践することである。そのためにも、大人が「助けられ上手」になることが最重要である。大人が救われてこそ、子どもも本当に幸せになれるのである。(伊達市SSW 山岡 聡)

庶務管理係より

毎年、多くの企業や個人・団体から「伊達市の教育振興に」と寄付をいただいておりますが、このほど遠く岡山から復興支援として義援金をいただきました。

寄付されたのは、岡山県早島町の「早島絆の会」で、昨年12月に同会が開催した『震災復興支援チャリティーコンサート』に桃陵中学校合唱部が招待されて出演したことから、「コンサートの収益を被災地でもある桃陵中学校へ」との申し出でした。

去る2月7日、早島絆の会代表の堤忠行氏が遠路より市教委を訪れ、湯田教育長に寄付金を手渡されました。堤氏は「今後も福島県を支援していきたい。伊達市が、他自治団体との橋渡し役になることを期待する。」と力強く話されて行かれました。

また、昨年は、同じ早島町の弦楽合奏団「アンサンブル早島」からも本市に寄付をいただいています。音楽を通して遠い地から支援をいただけることは大変有り難く、心強いものです。ありがとうございました。



お知らせ

伊達ジュニアウィンドオーケストラ・東京藝術大ウィンドオーケストラ第3合同演奏会
日時：平成26年5月25日(日)13:00開演 場所：保原体育館 ※入場無料